

東北水産研究レター No.17

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2000398

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



東北水産研究レター No. 17 (2010.9)

イトヒキダラを食べたことがありますか？

イトヒキダラは分類学的にはタラの仲間にも属します。正確にはエゾイソアイナメ（北日本ではドンコと呼ばれる）に近いチゴダラ科の魚です。産卵場は伊豆諸島周辺にあるとされ、成魚は北海道～東北地方の太平洋岸沖の水深300～1,500mの深海に生息しています。沖合底びき網漁業で漁獲され、現在は宮城県の石巻港に大部分が水揚げされています。「イトヒキ」と呼ばれることからわかるように腹鰭が長いのが特徴で、体色がやや赤みを帯びていることから、魚市場では「アカヒゲ」と呼ばれています（写真1）。



写真1 イトヒキダラと練り製品の一例（蒲鉾）

イトヒキダラは1年に1万トン前後が水揚げされていますが、スーパーなどで鮮魚として売られることはありません。これは、本種が練り製品の原料に用いられるためです。ですから皆さんも蒲鉾などに加工されたイトヒキダラを食べたことがあるかもしれません。

毎年、私達はイトヒキダラの資源量を調べています（写真2）。調査の結果から、1996年、2002年、2003年に標準体長



が10cm以下の小型魚が多くいたこと、この大きさの小

写真2 トロール調査で採集された漁獲物

型魚は毎年獲れるわけではないこと、小型魚が成魚（40cm以上）になるまで約7年かかること、近年、小型魚は東北の南部に多く、北部に少ないことが分かりました（図1）。

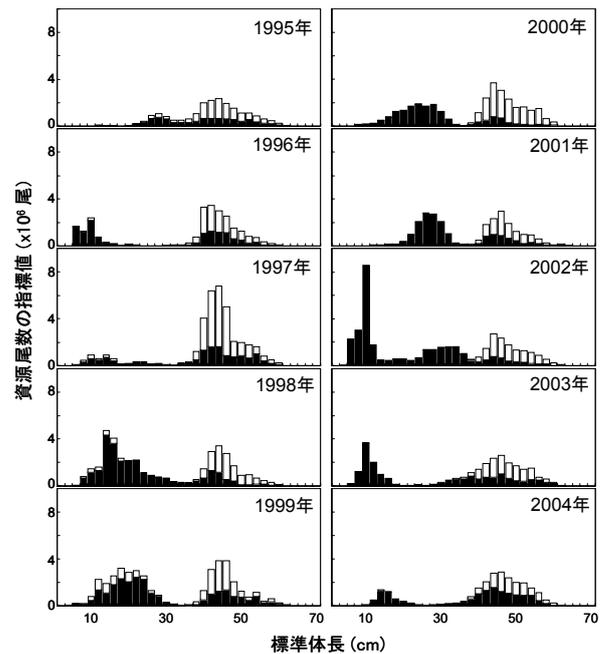


図1 東北地方の太平洋岸沖におけるイトヒキダラの体長組成の推移。
黒棒は宮城～茨城県沖、白棒は青森～岩手県沖を示す。

このように、小型魚が毎年安定して加入（新たな資源として群れに加わる）するわけではなく、成長も決して速くないことから、資源を減らさないように慎重に漁業を行っていく必要があります。イトヒキダラの資源を安定的に利用していくために調査を継続していきます。

この業務に取り組んでいる資源評価研究室の



伊藤正木 室長



服部 努 主任研究員



成松 廣二 主任研究員

コンテンツ ① イトヒキダラを食べたことがありますか？ ② 魚の子供を保育所に運ぶジェット流

魚の子供を保育所に運ぶジェット流

生物的ホットスポットとは、生物生産が回りに比べて局所的に高い海域のことを指します。

ダーウィンの進化論で有名なガラパゴス諸島周辺のように、強い海流が島にぶつかって海深くから栄養豊富な海水が上がってくる海域では、植物プランクトンの生産が活発になり、それを捕食する動物プランクトン、さらには魚類や海産哺乳類などが多く存在します。

このような地形によって作られるホットスポットについては、従来から知られていましたが、島などが全くない北西太平洋の真ん中にもホットスポットが存在し、この海域でも、植物プランクトンの量が周りの海域よりも豊富で、マサバ、ゴマサバ、カタクチイワシなどの子供も多く分布していることが最近の研究でわかってきました。

海の真ん中で、どのようにしてホットスポットが作られているのでしょうか？人工衛星による観測データからホットスポットに向かう海流の存在が指摘されており、私達は調査船若鷹丸によってその実態を調査しました。



写真 漁業調査船「若鷹丸」

海中に設置してあった流速計の回収風景

調査により、黒潮続流から分岐した高速の海流が北東方向に流れ、南側に分岐した流れを伴っていることがわかりました(図1)。この流れはジェット流と呼ばれています。

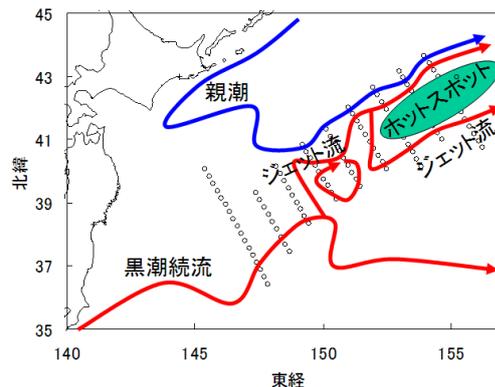


図1 北西太平洋における生物的ホットスポットとジェット流の分布。丸印は若鷹丸の調査点

ジェット流は塩分が高く、水温が高い南の海水を北の海域に運んでいること、その水が冬季に大気によって冷やされて深い層の水より重くなるため、深くまで混ざっていることがわかりました。このことによって栄養豊富な深い海の水が表層に持ち上げられ、生物生産が活発になっていると考えられます(図2)。

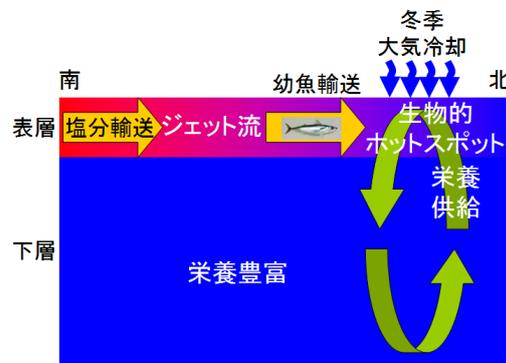


図2 ジェット流と生物的ホットスポットの形成メカニズム

ジェット流は、南からマサバなどの子供をホットスポット、いわば保育所へと導く役割を果たしていると考えられ、今後、一層注目して研究していきたいと考えています。

この業務に取り組んでいる海洋動態研究室の



伊藤進一 室長 清水勇吾 主任研究員 寛 茂穂 研究員

東北水産研究レター No.17 (平成22年9月発行)

(編集) 独立行政法人水産総合研究センター 東北水産研究所 業務推進部 (発行) 独立行政法人水産総合研究センター

〒985-0001 宮城県塩釜市新浜町3-27-5 TEL. 022-365-1191 FAX. 022-367-1250 ホームページ <http://tnfri.fra.affrc.go.jp/>